卒　業

深水由美子

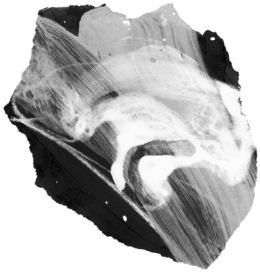
十八歳の私（くみ子）は突然父を失った。解せない死だった。そこから不可解な激変する世界と向き合わざるをえなくなった。まだ高校生の未熟な自分には、すべてが荷が重すぎる。しかし、前に進むしかないのも事実なのだ。

「全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」

中島敦の『山月記』だ。日本人なのにハーフのマリオンより日本語の怪しいエリが、私の後ろでしどろもどろになりながら本文を読まされている。あんた本当に日本人？と突っ込みたくなるほどの酷さだったが、エリに当てたことを一番ヤバいと思っているのは教壇で俯きかげんの江崎先生だろう。若くて少し丸っこい体形に四角い黒ぶちメガネが対照的だ。彼はとてもナイーブな人だから、ひょっとしたらエリよりも傷ついていたりするのかもしれない。

私は、作家というものは随分当たり前のことを堂々と書くんだなと思いながら聞いていた。板書を終えて前を向いた江崎先生の視線が、一瞬私のところで止まった。私は自分が頬杖していたのに気付いて慌ててノートを取るふりをした。黒板には「臆病な自尊心」、「尊大な羞恥心」、その下に「同じもの」とか、黄色いチョークで囲んだ「生の不条理」などのフレーズが丸っこい読みやすい文字で書いてある。名は体を表す。文字は人柄を表す？　全く先生そのまんまではないか。

恥を掻いて心穏やかではないエリがシャーペンでしきり



に背中を突いてくる。「お疲れ」と小声で声を掛ける。それでもしつこくちょっかいを出してくる。ちゃらんぽらんなくせにプライドだけは妙に高いのだ。悔しいなら少しは勉強すれば？　と心の中で毒づく。全く鬱陶しい。

それから数か月後、虎になった李徵と同じことを私は十八歳で体験した。

父が突然、何の予告も前触れもなく死んでしまったのだ。学校から戻ると家には既に父の姿はなく、スタンバイしていた伯父さん（母の兄）の車に弟と二人乗せられ病院へ行き、説明も何もなく、いや、説明はあった気がするが理解できず、霊安室に移り、それから自宅へと、ここからは母も一緒に、知らない人達から言われるままに移動した。

思い返すと私のまだ僅かばかりの人生の中で最も重大な出来事なのに、脈絡のない部分的な記憶しかなく、しかもそれらは不必要に明瞭だった。例えば出棺の間際、父の肩のあたりに白い百合を飾ったとき一瞬触れた父の頬の陶器のような冷たさ。骨上げのとき、石の台に乗せられた白骨から立ち上る異様な熱気とクーラーから噴出される冷気の妙な混ざり具合。その熱の中に父の匂いを嗅ごうとして吐き気を催し、従妹に付き添われて行ったトイレの鏡に映った自分の蒼白な顔。

結局父は、私自身は首を傾げた状態のまま「突然死」として処理された。

父のことは十一月の半ば。高三だった私は受験しようと思えばできないことはなかったが、一月中旬に控えている共通テストの準備が手に付かなかった。結果は目に見えている気がしたし、何より気力が全く沸かなかった。自分を支えていたものが消失したのだ、と気付くまで何日もかかった。支えられているという自覚すらなかったのだ。支えてくれていたのは、強いて言えば「家族」というものだろうか。

一か月ばかり経った頃、母が部屋にやってきた。珍しいことだ。私はお父さんっ子ということになっており、父はいつもドアの外で「いいか」と声を掛け、「どうだ調子は」で部屋に入りベッドに腰かけて、「実はな」で話が始まる。でも深刻な話をしたことはなかった。実家のお祖母ちゃんが少し認知症が酷くなった。施設に入れようと思うがどう思うか。「むしろお祖父ちゃんの方に配慮が必要なんじゃない？　一緒に入所できるところないのかな」と私は、よく知りもしないことをアドバイスする。または、弟のはる君がお母さんに酷いことを言うので、お母さんが参っている。反抗期に入り始めたらしいから、仕方のないことだけど、

おまえがお母さんとはる君の様子を見て、できることなら上手く声を掛けてくれないか、といった他愛もないことだ。結局父と母で話し合い、最終的には父が決めるのだから私に相談する必要はないのだが、父の狙いは明らかな気がした。長女はこのようにして作り上げられる、といつも感心した。仕方ないなあ、一応気にかけてみるよ。責任は持てないけど、などと答えながら、結構気を使って頑張ってしまう。頼られる、のはいい気分である。でも自分のことが必ず疎かになる。それが難点だ。

「試験、どうするの」と母が恐る恐る尋ねる。床に改まった様子で正座している。この部屋に座布団などないから、私は椅子に腰かけたままで、妙な具合だ。「ベッドに腰かけてよ」と言うと、ああ、と立ち上がりながら初めての部屋のように中を見まわした。「受けない。結果は分かっているから」と私は答えた。「そんなこと言ったって」と母は少し狼狽しているようだ。「そうねえ、それどころじゃなかったしねぇ」と語尾が心細げに消えていく。

「一年だけ浪人する。どこか予備校に行かせてくれれば何とかする。失敗したら就職する」。私ははっきり言った。これは父が亡くなってからよくよく考えて出した結論だ。

「そんなこと言ったって成績は凄くいいわけだし、すぐ就職なんてもったいない」。だから、それくらいの気持ちで頑張るってことだよ。「そうねえ、頑張ってほしいわねぇ。で、他のお友達はどうなの?」。この期に及んで何言ってるんだろう。黙っていると「大丈夫かねぇ」と同じところをぐるぐる回る。今年だめもとで受けなさい、ということでもないらしい。要するに自分の考えはないのだ。探りを入れに来たのだろう。こんなとき父が結論を出していたのだから、いつまで経っても結論は出ないはずだ。これまで当たり前過ぎて考えもしなかったことを改めて思う。「福岡の予備校で一年頑張る。お金はお父さんのが出たから、それくらい出せるでしょ」と言うと、「何で福岡? 近くにほどよいのがあるでしょうが」。じゃ、そこにしますと言えば、やっぱり田舎じゃない方がいいのかねぇ、とまた迷い始めるに決まっている。結局私が押し切った。

今年は受験しないと決めたらクリスマスと正月がいきなりやってきた。しかし中途半端な状態で時間があるのは拷問に等しいと感じるときもある。が、やはり勉強には手がつかない。やっているふりしてだらだらと過ごした。

卒業もして暇で仕方ないので、たまにショッピングモールなどに出掛けると、中途半端に弾けた格好で心持ち髪を明るく染めたりカールしたりした友達を見かける。フリルの沢山ついたスカートにカールたっぷりのポニーテールや、

金髪の混ざった南瓜みたいな頭に憧れていたくせに。どうせならもっと派手にやればいいのにと思う。しかもみんなしっかりマスクしている。どこかしら進路が決まったのだろう。解放された表情だ。晴れやかだ。

受験しないと決めて卒業してしまえば情報網から完全に切れた。あいつは無謀にもあの大学に挑戦するつもりのようだ。あいつはビビッて志望校を下げるつもりだとか、模試の結果が返却されるたびに、複数の友人からラインが来る。それで友達の大体の状況が摑めた。鬱陶しいと思っていたが、今はちょっと懐かしい。結局誰が何処に受かって何処に行くことに決めたか、全く分からないままだ。

気配を消して買い物客に紛れて気付かれないように足早に店の外へ出る。無印で買った新しいノートとファイルの入った紙袋を前の籠に放り込み自転車を走らせる。自宅まで三十分程もあるが、通学で鍛えた脚力はまだキープされている。帰ったら後輪に張り付けてある高校の通学章を剝ぎ取ろうと思う。

家を出る間際まで、「別に天神まで出らんでも、家から通える場所は色々あるでしょうが」と母は言っていた。あんまり繰り返すので、そしたら払い込んだお金戻って来ないよ、と言うのも面倒だ。まるで口癖みたいになってしまっている。本人は平気だろうが、言われる方はいちいち癇に障る。「嫌になったら、いつでも帰ってくればいい。あんたの家だから。お金は心配せんでもいいとよ」とも言った。まるで自分が頼りになる存在であるかのような物言いだ。

お金のことを母が口にするたびに、ぱんぱんに膨れ上がった風船球に剃刀を当てているような気分になった。父の命と引き換えになにがしかのお金を手にして、この人は何も感じないのだろうか。テーブルクロスは必ずピンクやオレンジや赤のチェック。戸棚に吊り下げられたフリル付きのレースのカーテン。靴箱の上に飾られた手作りのピンクのドレスの人形。薄汚れた青いボタンの瞳にむかついてゴミ箱に放り込んだのはいつだろう。

一人で考えたいことがあるから家を離れたい、と言ったとき、隣で黙って聞いていた伯父が「何もこんなときに、一番大変なときに家を離れんでも」と口を挟んだ。お母さんを捨てるのと同じことではないか、と言うのだ。最近母は事あるごとに近くに住む伯父に相談している。二人兄妹で伯父が母方の祖父母と同居していた。代々の農家で、父は市役所に勤める傍ら、伯父から借りた田畑を母と耕していたのだ。母が、何も捨てられるとは思わんけど、誰かおらんと寂しい、と悪びれずに言うので思わず「伯父ちゃんがおるから、いいやろ」と言うと、馬鹿が、と伯父が吐き捨

てるように言った。
「こんかときに家族で支え合わんと、何が家族か？　すぐにばらばらになる。おまえもそれくらい分かる歳やろうが」
「もう、息が詰まる。一年だけここを出る。もう一年もないやろ。十か月したら必ず戻ってくる。不合格だったら農業やる。それか就職する。きちんと連絡取る。これが条件。これだけは絶対譲れん」と言うと、伯父は「言い出したら聞かん。勝さんも育て間違うたな」と言った。
母は申し訳なさそうな表情で上目遣いに伯父を見た。私のことをこんなふうに言う資格がこの人達にあるのだろうか。私を育てたのは少なくとも父だ、と思った。
だらだらと続いた中途半端な無為の時間が過ぎると、もう桜は咲き終わっていた。

予備校の女子寮には殆どの生活設備はそろっている。後は衣類と洗面用具、勉強道具を運び込めばいいわけで、中くらいの段ボール二個もあれば十分だった。下見は済んでいる。母が送りがてら車で運んでやるというのを断って宅配で送った。その日、バスと電車を乗り継いで昼過ぎには寮に着いて部屋を片付けた。個室にはバス・トイレ・クローゼット、冷蔵庫・洗濯機、机・本棚・ベッドがあり、共有スペースは自習室、食堂、多目的ルーム。一階エントランスには管理室があり、オートロック防犯モニターと全てが完璧で真新しく清潔だ。
従妹が結婚したとき父とお祝いを持って行った新居の賃貸マンションより、今度の私の部屋の方が遙かに広くて立派だ。あれはマンションと言うよりアパート。働き手が手取り十三万じゃこんなもんじゃろう、と父は苦笑した。一体何なんだろう、この差は、と思う。
宅配業者が荷物を回収しに来たとき、居合わせた伯父と母が玄関で話すのが聞こえた。あの人が死んであの子は人が変わった。ショックだったとだろう、俺だって驚いた。おかしいと言えばおかしい。けど証拠もなんもないとだから、医者も何も言えんやろう。昔から時々起こることではある。私が家におったら何かできたとかもしれんと思うと……。また母が涙声になり会話は途切れた。
若い宅配業者が「これだけ？」と聞いた。私は、そうよ、と答え、持ち込みにすればよかったと後悔した。この程度の荷物に自宅まで呼びつけられ、なにがしかの費用の上乗せはあるにしても失礼な話ではある。しかし持ち込みにしたら母の車に頼るしかない。いずれにしても今の私の自由は限られている。何となく不機嫌な様子で業者は段ボールを二つ重ねて、あざーすと声を掛けて出ていった。

私はこれまで人間関係で悩んだことはない。特別な努力をしなくても、いつの間にか傍には数人の親しい人間がいて必要な情報を運んでくれた。誰かとの会話があった。彼らは恐らく親友と呼べる存在とは言えないだろう。が、少なくとも退屈な学校行事でお弁当を一緒に食べる相手がいないと悩んだ記憶はなかった。

最初に声を掛けてきたのは綾だった。公立進学校出身で、私と同じ医学部を目指していた。他に何となく予備校の五階の自販機コーナーで群れ始めたのは、二浪目の佐々木と雑誌で見かけるモデルより整った顔立ちの斉藤だ。彼の身長は平凡だったが、小顔でほっそりしているので遠くから見るとバランスが取れていて恰好がよく、最初から、特に女の子の間では目立つ存在だった。ずんぐりして大柄な佐々木とつるんでいるのが不思議だったが、出身校が同じだそうだ。私立の名門中高一貫校だ。

「学年が違うから全然、佐々木のこと知らなかった。それに今みたいに太ってなかったらしいから。そりゃ廊下ですれ違うくらいはあったでしょうよ」。みんな年上なのに、佐々木さんでも先輩でもなく、佐々木と呼んだ。それを彼は気にするふうでもなく、「この一年の成果」と言いながら、腹のあたりの脂肪を摘まんでみせたりする。「硬い。ばちばちしてる！　何これ。筋肉？　くみ子、触ってみて」と綾が佐々木の腹を叩く。いいよ、と私はここでいつもチョイスする甘すぎるココアを飲み干す。佐々木は親が医者なので、「一応医学部を狙っている」ということだった。

ＪＲの駅に近い高いビルが立ち並ぶ一角に校舎はあり、五階のその狭いスペースが無理やり切り取られたようになっていて、外の空気を吸うことができる唯一の場所だった。少し歩けば大通りに面しているので、立ち上ってくる空気は決して清々しいものではなかったが、直に外の風を受ける僅かな休み時間はやはり格別だった。

「息抜き、メリハリ、これは重要だよな」と栄養ドリンクを飲みながら斉藤が佐々木の肩に手をまわした。斉藤より佐々木はかなり上背があり横幅も倍近い。子供が親にぶら下がっているように見える。

ゴールデンウィークの特別講座が終わったばかりだが、やがて夏期講座が始まる。今度もまた意欲に溢れた現役高校生が大挙して参加してくるのだろう。講義室の入口扉に貼られた座席表を見ただけで、その数に圧倒された。そして自分達が彼らとは違う追い詰められた存在であることを認識させられる。それが鬱陶しかった。

数日前、最初の模試の結果が返却された。今よくてもあまり意味が無い。これを参考に弱点部分を夏が終わるまでに丹念に探し出し強化しておくこと。そうすれば後は嫌で

も志望校が追いかけて来てくれる。
担当の先生は柔らかな物腰の数学の先生だ。三十代半ばくらいだろうか。机の上に、先生に抱きかかえられた小学生ぐらいの男の子と、まだ歩き始めたくらいの女の子の写真が飾ってある。職員室に質問に行っても、平日も土曜日も夜の十時近くまで必ず先生の姿があった。彼は子供達とあんな写真をいつ撮るのだろう。

去年の高三の秋頃、順調に成績を伸ばしていたときのような勢いはないが、まあそこそこの成績だ。高校のときは模試の結果が渡されるたび、友達同士無邪気に見せ合い盛り上がっていたのに、今は成績のことなんて絶対誰も言い出さない。気楽さを装っていても私達が置かれた状況は深刻さを増しているのだ。ここ数か月の過ごし方で人生が決まる、と言ってもある意味言い過ぎではないからだ。
「息抜きが必要だ」と斉藤がまた言った。綾が「私、海が見たい」と甘えた声で斉藤に言う。
「おう、俺が連れてってやるよ。気晴らしに明日ぐらいどっか行こうぜ。佐々木の車で」
「佐々木、車持ってんの？　さすが」。綾が佐々木の太い腕をばんばん叩く。佐々木はされるままになっている。「くみ子も来るよね」と綾に声を掛けられ、いいよ、と私は答えた。
期待するなよな、ボロい中古車だから、と言っていたが本当だった。婆さんを乗せるとき車椅子が積み込めて便利だからワゴン、だそうだ。彼が時々自宅に戻るのはそのためだったのか、と思った。確かに内部にあちこち傷や凹みがある。
「佐々木さん、僕はあなたが大好きだけど、車の趣味だけは理解できません」と斉藤が言う。佐々木は笑っているだけだ。斉藤は将来スポーツカーなんかを乗り回しそうだ。
「でも、何か人柄が表れているよね。いい感じ」と綾が斉藤を見ながらさり気なく言うが、斉藤は気にも止めていない様子だ。
二人が付き合っていることは何となく気付いていた。多分寮の女の子の殆どは詳しいことまで知っているだろう。と言っても今は軟禁状態みたいなものだから、五階の自販機コーナーで休み時間を過ごす程度だ。幸運にも二人きりであればキスぐらいはできるだろう。
女子寮の給湯室で綾と居合わすと、必ず斉藤の話題になる。
「彼ってさ、遊び人よね。そう思わない？」。そうだと言えば否定してくる。そうではないと言えば、これまで付き合った女達のことを事細かに教えてくれる。

「詳しいね。そんな情報、何処で仕入れてくるの？」。色々とね、ルートがあってね、と自慢げだ。佐々木が高校時代、女の子達から「パパ」と呼ばれていたことも教えてくれた。

二人は順調だとも、そうでないとも受け取れた。上手くいってても、きっと不安でたまらなくなるときが時々あるのだろう。顔を合わせるたびに、ころころ表情が変わる。そんなことがもう一か月以上も続いている。そんな暇あったら勉強すれば？ と言いたいが、言わない。

口にしたら最後、私は彼女の不満のはけ口になりそうな気がする。無神経なことを言う最高に嫌な女、というわけだ。

都市高速に乗ると、あっという間に糸島に着いた。ここは数年前、都心にあった国立大学が一部の学部を除いて移転してきたので、あちこちにそれらしい校舎が建ち並んでいる。学研都市という名の駅ができたくらいだ。

学生と思しき若者が至る所にいる。一様に自転車に乗って通行人の間をすり抜けていくので、見ていて危なっかしくて仕方がない。

学部を考えなければ、この大学に手が届きそうなのは、恐らく佐々木以外の三人。しかし斉藤は東大を狙っていたし、綾は彼を追って上京するのだろう。私も確実に入れる国立か公立の医学部を狙っていたので、ここはどうでもよかった。佐々木も特に関心なさげだ。

「海よ、海。海を見に来たんだから、そっちの道を真っ直ぐ」

佐々木の後部席に座った綾がスマホを見ながら佐々木の肩を叩く。

「ナビのない車って今時あるんだね」と綾が言う。中古車だから、と佐々木が答える。

「ここに来たことあるの？」と私が尋ねると、「婆さんを乗せて、たまに。うまい店知っているから連れて行くよ。海もきれいだ」とハンドルを切った。

地元の食材が売りのイタリアンレストランで昼ご飯を食べ、砂浜の先の岩場に白い鳥居があり、その向こうにしめ縄で繋がれた夫婦岩がある場所で車を止めた。砂浜に下りた。海は青く風も心地よかった。

「丁度今の時期は夕陽があの真ん中に沈むよ。有名な観光スポットだ」。夫婦岩を指さして佐々木が言った。

「見たい見たい、ねえ、見ていこうよ」と綾が佐々木の腕摑んで振る。

斉藤がふっと白い鳥居の向こうの岩場に向かった。綾がすかさず後を追った。岩場に腕組みして立つ斉藤の側に、

綾が肩が触れそうなほど寄り添って立っているが、足場が不安定でふらふらしている。さすがに斉藤の腕に縋ることはできないようだ。何となく後ろ姿の斉藤は居心地悪そうに見えた。私達の目を意識しているはずだから当然かな、と思う。佐々木も私も無言だった。

その後、近くのカフェに寄ったが、その頃から斉藤は、むやみに近づきたがる綾を露骨に無視しだした。目に見えて不機嫌になった。綾も気付いたようだ。

斉藤は綾のことなど女友達の一人ぐらいにしか考えていないのは明らかだ。彼を狙っている女の子は他に何人もいるのだから当然だろう。正直に言えば最初からそんな感じだ。一方的に追いかける綾。どうでもいいけど気の毒だから時々相手をしてやる斉藤。分からないのか、分かりたくないのか。最近の綾を見ていて、情けなさを通り越して不快になることが多い。

プライドを失くした人間はいいようにあしらわれるもんだ。父の言葉だ。本当だ。

日没まで時間をつぶすにはまだ時間がありすぎた。それよりそんな雰囲気では完全になくなった。帰ろう、と誰かが言い出した。

帰りの車はみんな黙りこくってお通夜のようだ。佐々木が音楽を流し始めた。クラッシックしか無いんだよね、と言いながら流れてきたのは「白鳥の湖」だ。

チャイコフスキーのバレエ音楽が気まずい沈黙を乱暴に埋めていく。黒鳥がくるくる回る威勢のいい場面の音楽だ。この曲をチョイスした佐々木は何と素晴らしいセンスをしているのだろう。そういえば彼はスマホで時々バレエを観ている。私は可笑しくて仕方なかった。

「佐々木とバレエ。最高」と言うと、そうかぁ？ と佐々木がのんびりと答える。帰り着く前になるべく普通の状態に戻しておきたくて、柄にも無く楽しいふりなどしてみたが、残りの二人は全く反応がなかった。

私達を寮に送ると、佐々木は「俺、今日実家に泊まってくから」と帰って行った。

二週間ごとに校舎の入口のイラストとスローガンが入れ替わる。いよいよ定番の「夏を制する者は受験を制する」が登場した。それを裏打ちするように、じりじりと日差しと気温も厳しさを増していった。

講義室での僅かな休み時間は、用を足してもまだ少し時間が余る。突っ伏して睡眠を取る者、イヤホンで音楽を聴く者、様々だ。

何かの拍子に、みんな十年後は何してるのかな？ と誰かが言い出した。ここにはいつもの四人ではなく他の生徒

が混じっていたと思う。みんな結構真剣に答えていたのに、宅浪で失敗したので家は近くだけど寮に入った二浪目の佐々木は、さあね、と答えただけだった。二浪なので言えないわなと思っていた。たかが大学、されど大学。こんなところに押し込まれているのだから、視野は嫌でも狭まる一方だ。一浪ですらこんななのに、相当なプレッシャーなのだろうと思う。私ならとっくに音を上げてる。

佐々木は、本当の夢は国際情報を発信するYouTuberだと言っていた。もっとも、このプラットホームも最近はかなり怪しくなってきたが。勿論、言論チェックが厳しくなったという意味だ。自販機のコーナーで一人スマホに見入っている佐々木の丸い背中によく出くわす。何を観ているのかと尋ねたとき、実はな、俺こんなのに憧れてる、と話してくれた。

中国・中東・アメリカ・ロシア、そしてカナダ、EU、NATO。それらの地域の情報を発信する登録番組がずらりと並んでいる。

よく観ている番組を太い指で器用にスクロールする。さっき観ていたのはこれ。ウクライナ絡みの番組。聴いてみる？ というのでイヤホンを貸して貰って発信者の話を聴いたが、何も私の頭に引っかかってこなかった。全くと言って良いほど理解できない。腹立たしささえ感じた。

私は言うに事欠いて、何なの、これ。この人達、これがお仕事？ と言うと、佐々木は傷ついたような顔をした。馬鹿な質問をしたものだと思う。私という人間の本質がバレバレだ。穴があったら入りたい。今でも時々そう思う。

佐々木は世の中のことをよく知っていた。というより私が異常なのだ。ほぼ情報から疎外された存在だ。私が知っているのは受験科目の中身に過ぎない。その自覚すらなかった。しかし殆どの人間は佐々木が言うように似たようなものだ。テレビと新聞と隣近所、学校、職場からの情報。それが全てだ。世の中はそれで動いていると思っている。背後にある世界規模の大きな動きや、その底に蠢いている人間の様々な種類のエネルギーのことなんて考えない。

「ここから世界が見える」と狭いスマホの画面を指さしながら佐々木は言った。

「ゴミの山でもずっと見ていると本物が段々分かるようになる」とも言った。

中学のとき、体育館の改装工事があって、休みの日に友達と部活の帰りに覗きに行った。足場が組んであり、その奥に入ると体育館の入口に養生の布が垂らしてあって、生徒が入らないようにテープで固定してある。端っこを捲ると、ほぼ工事が完了していた内部がはっきりと見えた。